安高啓明研究室×附属図書館連携企画Ⅸ

解説シート

ペリー、謎多き国“日本”と出会う

“嘉永3（1853）年 6 月、アメリカ東インド艦隊司令艦長マシュー・ペリー率いる4隻の軍監「黒船」が、開国を求めるフィルモア大統領の国書を携え、浦賀沖に来港した。翌年に再び現われたペリーは、条約交渉を迫り、日米和親条約の締結に至る。”

開国の一幕として語られる「黒船来航」については、誰しもが歴史教科書などで聞いたことのある有名な事件でしょう。しかし、幕府との交渉による条約締結の前後には、教科書には収まりきれない様々な出来事がありました。

今回の企画展では、ペリー艦長の記録『日本遠征記』を取り上げ、彼の長い船路を紹介します。

ごあいさつ

嘉永６（1853）年、マシュー・ペリー率いるアメリカ東インド艦隊が浦賀沖にあらわれたことは、日本史上において一画期となった。島原天草一揆以降、江戸幕府はオランダと中国と日本の法令を遵守することを前提に長崎で貿易し、朝鮮と琉球、蝦夷と交流することで、日本を中心として対外関係を築いていた。“日本型華夷秩序“ともいうべき国際関係が、ペリーによる交易交渉の申し出により転換を余儀なくされる。日本でこれまで営まれてきた“鎖国”状態から脱することを意味し、国内は動揺することになった。

ペリーの来航をきっかけに、日米和親条約、日米修好通商条約を締結したことで、日本は関税自主権を喪失、領事裁判権を認めるなどといった不平等な関係にあった。その後、イギリス・フランス・ロシア・オランダとも同様の条約を結ぶことになり（安政五ヶ国条約）、鎖国から開国を迎えた日本には厳しい現実が突きつけられる。政治・外交・経済にとどまらず、日本古来の文化・風俗・芸術などにも影響を与えることになった。

こうした状況をつくったのは言うまでもなくペリーである。ペリーは海軍の軍人であるとともに、条約交渉に臨んだ外交官でもあった。その一方で、研究者としての側面もあったことはあまり知られていない。ペリーは、帰米後、米国政府の要請に応じて『日本遠征記』全３巻を 1856 年に編纂する。これまで日本の情報は滞在を許されていたオランダ商館員たちによるものが中心だったが、日本を目の当たりにしたペリーから発せられる内容は新しい視線を持つものとして評価されている。

『日本遠征記』には日本の産業や風俗などを詳しく記述するとともに、その様子を描いた挿絵が所収されている。本企画展ではこの挿絵に注目し、ペリーの目に映り、海外で紹介された江戸時代の日本社会を取り上げる。現在とは異なる日本の情趣をみることで、連綿と続く日本の伝統文化と、その源流を再認識してもらえる機会となれば幸甚である。

令和元（2019）年 11 月 27 日

熊本大学大学院人文社会科学研究部
准教授　安高　啓明

Ⅰ　ペリー艦長の長い旅

1852（嘉永２）年１１月、アメリカ合衆国バージニア州ノーフォーク港を出港したペリー艦隊は、喜望峰を巡り、インド・上海を経由して日本列島にやってきました。第１章では 1852 年と翌年の来航における江戸幕府との交渉前後に注目し、ペリー艦長一行が経験した極東アジア日本の姿について紹介します。

１琉球へ寄港

到着：５月２６日

目的：琉球王国との交渉

上海に到着したペリーは、日本へ向かう前に琉球へ立ち寄りました。那覇に寄港した艦隊は、首里城で琉球王国の接待を受け、同時に小笠原諸島を巡って現地調査を行なっています。幕府との交渉が失敗した場合の石炭・食糧の補給地としての役割を、琉球政府に期待していたのです。

沖縄牧港
―BRIDGE & CAUSEWAY　AT MA-CHI-NA-TOO LEW―

２浦賀沖に到着　-「黒船」襲来-

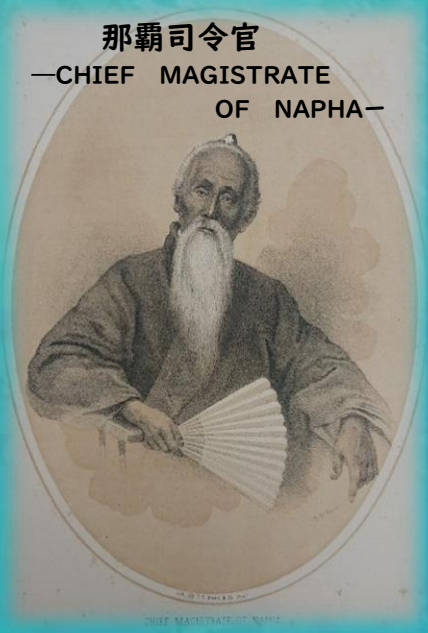
到着：７月７日

目的：幕府との交渉

琉球を離れた一隊は、本来の目的地である浦賀（現神奈川県）に到着しました。はじめは幕府の番船に囲まれ退去を命じられましたが、浦賀奉行所与力中島三郎助・オランダ通詞堀達之助を艦内に寄せ、交渉を進めます。江戸湾測量を図った後、浦賀奉行戸田氏栄との間で大統領国書授受式の調整を行ない、６月９日に久里浜（現神奈川県横須賀市）で国書を幕府に渡し、再来を約束しました。

この後、再び琉球を訪れ、石炭の供給を要求し、アメリカへの帰路につきました。

那覇司令官
―CHIEF　MAGISTRATE
OF　NAPHA―



アメリカ合衆国大統領国書（要旨）

一、米国と交易を行なうこと
一、米国船舶と遭難民を保護すること
一、米国船舶への石炭・食糧の補給を許可すること

『幕末維新外交史料集成　第二巻』　164 頁参考

３再来日と条約締結

到着：嘉永７年２月１１日

目的：アメリカ合衆国大統領国書の返答要求-条約締結-

一度帰国したペリー艦隊は、再び日本を訪れるためアメリカ・ノーフォーク港を出航しました。大西洋を巡り、琉球を経由して、江戸沖に到着します。

ようやく幕府との本格的な交渉を果たした一行は、「日米和親条約」締結という成果を携えて、一時帰国の途につきます。

日米和親条約（要旨）

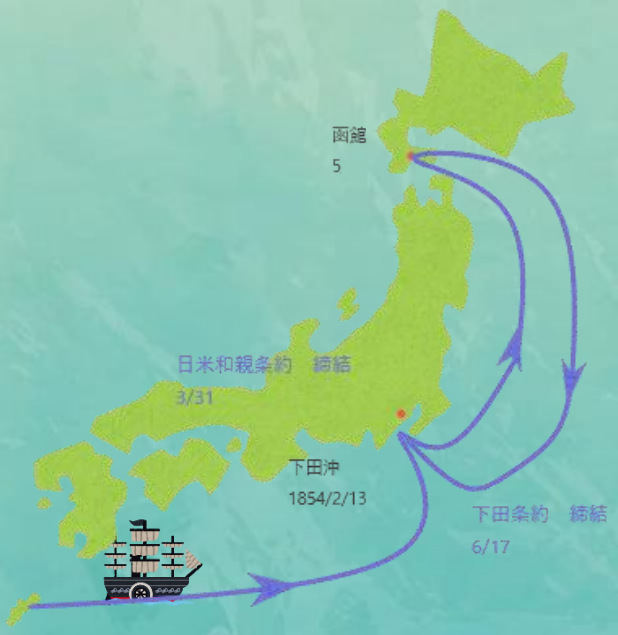
一、下田・函館の開港

一、米国漂流民の保護

一、米国への最恵国待遇の付与

…

『幕末維新外交史料集成　第二巻』227 頁参考



４「開港地」箱館へ

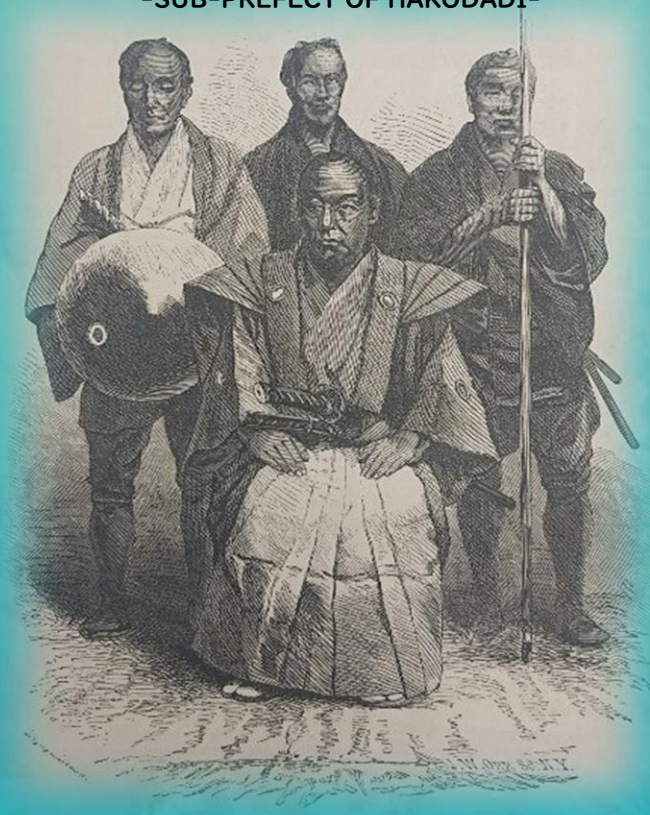
到着：５月下旬

目的：遊歩区域の交渉

締結を終えた一行は、開港を約束した箱館へ向かいました。沿岸測量の後、松前勘解由（松前藩家老）と食糧の提供や米国人の処遇について協議するも、ペリー直々に上陸して進めた遊歩区域（アメリカ人の行動範囲規制）の交渉については難航します。

箱館での交渉を中断し、幕府と直接話し合うために、一行は再び伊豆を訪れました。その結果、５月 22 日「日米和親条約附録協定（下田条約）」を締結させ、箱館内の遊歩区域は半径５里範囲に定められます。

函館副長官
（ペリーと交渉した遠藤又左衛門）
-SUB-PREFECT OF HAKODADI-



５帰国とその後-『日本遠征記』誕生-

追加条約の締結を遂げたペリー艦隊は下田を離れ、帰路につきました。途中立ち寄った琉球王国とも通商条約を結んだ後、指揮権を次席の士官に譲り、他の船員らより一足早く 1855 年１月 12 日、アメリカへ到着します。

その後ペリー艦長は、合衆国議会への報告として、1852 年からの航海日誌をまとめました。これが、本企画展で紹介してきた『日本遠征記』です。

帰国からわずか４年後、ペリー隊長は 63 歳でこの世を去ります。

Ⅱ ペリーが見た幕末日本

「如何なる点から見ても、日本帝国は長い間、考へ深い人々の異常な興味の対象となつてゐた」

ペリーは『日本遠征記』の序論でこのように述べています。二百年余り続いた鎖国状態によって、諸外国の多くの人々が日本に興味を持っており、ペリーもまたその一人でした。日本を訪れたペリーは町や田舎にも足を運び、そこに住む日本人にも目を向けています。

本章では、ペリーが見た日本の姿を解説していきます。

1 正装した僧侶

—PRIEST IN FULL DRESS, SIMODA—

「日米和親条約」締結の直前、ペリーと同行した「黒船」の船員1名が死亡しました。その船員を埋葬する際に現れた、日本人僧侶の様子です。ペリーは日本の領地内に、アメリカ人の埋葬地を要求しました。

アメリカ人の埋葬でも、仏教式の供養をしたこの僧侶の行動は、ペリーの目には「珍らしい儀式」として映りました。

2 日本の葬式

—A JAPANESE FUNERAL AT SHIMODA—

下田で執り行われていた仏式の葬式を描写したものです。中央の行列を僧侶が先導し、その後ろには、遺体を入れたと思われる駕籠が運ばれています。また、右下にはセーラー服を着た海兵などの姿も見られます 。ペリーは日本の葬式や埋葬の文化に大いに興味を持っており、『日本遠征記』には葬儀の一部始終を記述しています。

3 日本の女性

—JAPANESE WOMEN, SIMODA—

日米和親条約が締結された直後、下田でペリーが目にした日本人女性の姿です。条約締結後、ペリーは横浜の町長に招かれてもてなされましたが、そこにいた女性の「お歯黒」については「厭ふべき習慣」であると強い不快感を表しています。

一方で、「お歯黒」を除けば女性の外見は美しく整えられており、他のアジアの国に比べても日本の女性は尊敬されていると述べます。

4 日本の桶屋　—JAPANESE COOPER—

この絵は、箱館においてペリーが見た桶屋の様子です。ペリーは、「*日本の手工業者は世界に於ける如何なる手工業者にも劣らず練達であつて、人民の発明力をもつと自由に発達させるならば日本人は最も成功してゐる*」とまで、日本人の高い技術を讃頌しました。

二百年の間、外国文明から閉ざされていたと思っていた日本において、手工業が発展していることに驚いています。

5 日本の駕籠　—JAPANESE KAGO—

箱館でペリーが目にした「駕籠」と「駕籠舁き」の姿です。駕籠が旅行用として極めて一般的に利用されており、駕籠の装飾が所有者の身分によって変わることにも言及しています。ペリーはその乗り心地はあまり良くないと感想を述べつつも、箱館の道路は幅が広く、舗装が施されよく整頓されていると町の様子を伝えています。

〇参考文献

ペルリ提督［著］;土屋喬雄，玉城肇［訳］『日本遠征記』第１～4 巻、1948、岩波書店

函館市史編纂室編『函館市史』通史編第１巻第３編、1974、函館市/安高啓明『トピックで読み解く日本近世史』2018、昭和堂

研究代表：安高　啓明（熊本大学大学院准教授）

作成：山下　葵（熊本大学大学院）・川端　駆・山田　悠太朗（熊本大学）